

横川地区の中心となる大堂。別名、首楞嚴院（しゅりょうごんいん）、根本観音堂。円仁は承和五年（838）から同十四年（847）にかけて唐にわたり、帰国した後、嘉祥元年（848）にこの大堂を建立した。入唐求法の旅の中で、大風にあつて難破しかけたときに、観音力を念じたところ毘沙門が現れて嵐が鎮まったことから、堂内に聖観音像と毘沙門天像を祀った。後に良源が天延三年（975）に改築し、不動明王像を加えて祀る三尊形式となる。不動明王は五大明王のうちでも最も重要な明王であり、天台宗では特に強く崇敬されている。お堂は唐船の様式を模したと伝えられ、屋根の部分が遣唐船になぞらえて船形となっている。

横川中堂は新西国三十三ヶ所観音霊場のうち第18番の札所となっており、観音信仰の中心地でもある。新西国三十三ヶ所の第1番札所は和歌山県熊野的那智の滝であり、札所の多くが京都や奈良の近郊にある。横川地区全体に新西国三十三ヶ所の観音を模した石仏があり、これらすべてを参拝することで、実際に三十三ヶ所を巡ったのと同じご利益が得られるとされている。